Twitter自由言語大学 札幌言語学ミーティング 第14回

ノダの諸用法の語用論的分析

@sayunu

はじめに

現代日本語には「のだ」「のか」「のではない」といった形式がいろんな文脈で現れて、いろんなニュアンスを生ずる。本質的にどんな意味を持っているのかな。

(1) あ、雨が降ってるんだ。
(2) 大きくなったらパイロットになるんだ。
(3) ぼく、明日デートなんです。
(4) 早くこっちに来るんだ。
(5) その電線に触るんぢゃない。
(6) 私は悲しいから泣いたのではない。
(7) 顔色が悪いですね。病気なのですか？
(8) まだ足が治ってないんだから、重い荷物を持たせるなよ。

形態・統語的側面について確認

ノダは「ノ+ダ」である

ノ … 節を取って体言化する非自立の形式。
ダ … コピュラ。デアルやデスは基本的に文体差として扱う。

節を取るノは二種類ある（佐治圭三1991）

・代名詞的に機能するノ（準代名助詞）
　君が買って来た辞書はどこにある？ — 私が買って来たのは机に置いてあります。
・事柄を名詞句として表すノ（狭義準体助詞）
　君は辞書を買って来たね？ — 私が辞書を買って来たのを誰に聞いたんですか？

ノダのノは代名詞的に解釈されることはなく、狭義準体助詞の一種と考えられる。

ノダ節は統語上どこに現れる？

一般の名詞述語文と同様に、疑問の助詞カを伴ってノカとなる。ノダロウ。ノダソウダ。
ノで文が終る場合もある。コピュラがある場合と基本的には同義（体言止めに当るだろう）。
接続助詞カラ・ガ・ナラおよび用言の仮定形（スレバ）による従属節にも現れる（ノダカラ、ノダガ、ノナラ、ノデアレバ）。ノニ・ノデとの関係も指摘される（三上1953）が、今回は立ち入らない。
ただし連体修飾節の中には現れない。
ノデアルラシイやノデアルノダも可能な連接ではあるが、使われることはない。

ノダ節の中身は？

終助詞ヨやネなどが入らないほかは、大体入る。タ形も入る。ラシイも入る。

ノダ節の中がデスマス体になることは通常はないが、「お嬢様言葉」ではデスノ・マスノが現れることがある。ノダを内包してンデスノという形を取る例もある。こうしたノはちょっと性質が違うので、ひとまづ議論から除外するのが普通。

いろんな用法がある

ノダの機能は「先行文脈に対する説明付け」？

() 風邪をひきました。雨に濡れたのです。

() 顔色が悪いですね。病気なのですか？

ノダは「話し手が先に言ったこと、したこと、あるいは、話し手の状態（元気がないとか、外出の支度をしているとか）に対する説明を与える」（久野暲1973）

ノカは「話し手が見、聞いたことに対する聞き手の説明を求める」（同）

先行文脈に直接説明を与えるのではなく、先行文脈を踏まえて生ずる「課題設定」に対する解答を与えるという考えもある。（益岡隆志1991）

() 私は国立大学を二つ受験した。当時は一期校と二期校に分れていたのだ。

こうした用法があることは多くの先行研究で指摘されている（三上1953、林1964など）けれども、全ての用法がこれに当てはまるとは限らない。

() （ドアを開きながら）お前はもう帰るのだ。（山口佳也1975）

口だけを動かして「帰るんだ」と指示することもできるし。

() ぼく、大きくなったらパイロットになるんだ。

何に対して説明づけをしている？

分類

吉田茂晃1988による分類。

二句一文				《換言》
一句一文	聞手に伝える	聞手に情報を提示する	話手にしか判らないことがらを	《告白》
			聞手が知らないことがらを	《教示》
			聞手が信じていないことがらを	《強調》
		実現すべきことを聞手に示す	話手のなすべきことがらを	《決意》
			聞手のなすべきことがらを	《命令》
	話手が受け止める		初めて知ったことがらを	《発見》
			忘れていたことがらを	《再認識》
			相手の発言したことがらを	《確認》
	その他の特殊なもの		文章の調子を整える	《整調》

野田1997は、先行文脈との関係づけの有無と、「対人的ムード」「対事的ムード」との二軸の交叉により四つの類型に分類している。

	対事的ムードの「のだ」	対人的ムードの「のだ」
関係づけ	Pの事情・意味としてQを把握する 山田さんが来ないなあ。きっと用事があるんだ。	Pの事情・意味としてQを提示する 僕、明日は来ないよ。用事があるんだ。
非関係づけ	Qを（既定の事態として）把握する そうか、このスイッチを押すんだ。	Qを（既定の事態として）提示する このスイッチを押すんだ！

・先行文脈に対して明確な関係づけがある場合と、ない場合がある。

・ノダの内容を話し手が把握する用法と、聞き手に提示する用法がある。

話し手が受け止める ～ 対事的

聞き手に伝える ～ 対人的

使い方によって、様々なニュアンスが出たり出なかったりする

既に定まっていることを表す

ノダ節の内容は発話時点で既に決定されていることというニュアンスがある。

()　それは僕がやるよ。/ それは僕がやるんだよ。

()　君は参加するかい？ / 君は参加するのかい？

反論を受け付けない態度を示す

一般に受け入れられにくい、反論が想定される事柄をノダで提示すると、反論を受け付けないことを特に強める働きをする。

()　（引っ越しを拒む子供が、両親に）僕はここに残るんだ。

()　評論家が何と言おうとこの映画は面白いんだ。

重大な事柄であることを表す

発見の用法なら話し手自身にとって、教示の用法なら聞き手にとって、関心を持つべき重要で意味ありげな事実という感じが出る。（聞き手に「だからどうした？」と思わせる。）併せて「押し付けがましさ」が生ずる。

()　（窓の外を見て）あ、雨が降ってる。/ あ、雨が降ってるんだ。

()　ほら、花が咲いてるよ。/ ほら、花が咲いてるんだよ。

()　（唐突に）ぼく、明日デートです。/ ぼく、明日デートなんです。

非難

望ましくない事実を述べる場合、その責任者を責めているようなニュアンスを読み取られることもある。

()　また太った？ / また太ったの？

話し手自身が責任を持たない

発見の用法でも、教示の用法でも、話し手自身の証拠に基づく積極的な判断をしないという態度が表れることがある。

() 太郎君って服のセンスいいよね。— そうだな。/ そうなんだ。
() 祝賀会には誰が来るかな。/ 祝賀会には誰が来るのかな。

納得させようとする態度を表す

聞き手の行為を指示する発話では、命令形命令文に比べて、その行為が望ましいということ（ノデハナイでは望ましくないということ）を納得させた上で行動させようという態度を聞き手に感じさせる。

() しっかりエスコートしろ。/ しっかりエスコートするんだぞ。
() その電線に触るな。/ その電線に触るんじゃない。

相手が認識していないだろうことを表す（告白・披瀝性）

伝達的な発話は多くの場合、相手の認識していないだろうことを伝えるが、ノダ文にすると「あなたは知らないだろう」という意図を明確に示して伝達するような感じになる。

() 窓を割ったのは僕です。/ 窓を割ったのは僕なんです。

ガ従属節は聞き手がその事実を認識しているか否かに関わらず用いられるが、ノダガとすると同じく「あなたは知らないだろう」という意図が明確に出る。

() a. 今日は朝から大雨でしたが、用事があったので出掛けました。
b. 今日は朝から大雨だったのですが、用事があったので出掛けました。

相手が（知っているはずなのに）充分認識していない

一方、文脈上聞き手が知っているはずのことをノダで述べると、「あなたは知っているはず（なのに充分認識していないようだ）」という態度が出る。また「知っていれば当然次のような帰結に達するはずなのに、あなたはそれに思い至らなかった」という非難のニュアンスが生ずることもある。

() 彼は疲れて帰って来た<u>んだ</u>。まだ少し休ませてあげようよ。
() 本当に行ってしまうんですか。もう戻れないかも知れない<u>んです</u>よ。
() a. 雨が降ってるから、傘を持って行きなさい。
b. 雨が降ってる<u>んだ</u>から、傘を持って行きなさい。

統一的な説明づけ

先行研究：客体化・既成命題と主観的な再判断

或る命題を「既成命題」とし、話し手の「主観的責任」を添えて提出する（三上1953）
一旦判断された内容をノで「客体化、概念化」し、「しかじかという判断（の内容・事実）が成立する」という第二次の判断を下す（林1964）
ただ、「既成」とか「客体化」とはどういうことなのかよく分らない。

先行研究：話し手の責任からの切り離し、誰もがそう認めるはず

「聞き手に情報を提示する」発話において、非ノダ文では「内容を構成した責任はすべて話手にある」。それに対してノダ文では、体言化によって教示される内容が「先に存在している（存在していると見なされるべきことが主張されている）」（吉田茂晃1988）。

「述語の連体形として表される判断は、話し手（の主観）が責任を持ち、主張するものとしての判断ではなく、一応、話し手（の主観）の責任から切り離されたところで、いわば客体的に成り立つ判断である」（佐治圭三1991）とし、連体修飾との類似を示唆。

() a.この花は白い。
b.白い花が咲いている。

bの「白い」は当然そういうべきもの、聞き手をも含めて誰が見てもそう言うはずのもの」であって「問題にならないこと、つまり話し手の判断の直接的な表現ではない」ため、「そんなことはありませんよ」と返答した場合に否定されるのは「咲いている」という述語であって「白い」ではない。

…それっていわゆる「前提」（presupposition）ではないか？

前提というと

ごく一般的な前提の例

() 娘が熱を出してしまって。（前提：話し手に娘がいる）

狭義準体助詞のノに導かれる節は基本的に前提となる。

() 来週は休講なのを聞きましたか？（前提：来週は休講だ）
() 来週は休講だと聞きましたか？（「来週は休講だ」は別に前提となっていない）

ノダも同じと言えるか？

前提調節

() 娘が熱を出してしまって。（前提：話し手に娘がいる）

もし聞き手がその前提を知らなくても解釈が不可能になることはなく、その前提を併せて暗黙のうちに了解することで問題なく理解できる（前提調節、presupposition accommodation）。

調節される前提は次のように明示することもできる。

() 娘がいるんです。それが熱を出してしまって。
() 娘が熱を出してしまって。娘がいるんです。
() 娘が熱を出してしまって。— 娘さんがいらっしゃるんですね。

つまり、ノダ文において「話し手に娘がいる」が前提になっているわけではなく、むしろこの例では、ほかの文における前提であることを表現している。

ただし、必ずしも言語的な「文」もしくは「発話」に対して前提を補うというわけではない。そこで、ノダは**或る認知環境においてその命題が認知的に前提とされる**ことを表現すると考える。

ノダ文自体においてノダ節の内容は前提になっていない（駄目押し）

普通、文の前提は主節述語を否定文に変えても残るが、ノダ文ではノダの内容も否定されてしまう。

() 娘が熱を出さなかった。（前提：話し手に娘がいる）
() 娘がいるのではない。（「話し手に娘がいる」は否定される）

前提の特徴

特徴A）その命題を真と認める判断が先に存在すること
特徴B）その命題を話しても聞き手も疑うことなく真として受け入れること
ただし、真であることを疑わないことは、「疑う余地がないほど明白に正しいという根拠がある」ということを意味するわけではない。むしろ、自分から主張する想定ではなくなるので、証拠を持っていなくても消極的に受け入れることが可能になる。（「娘が熱を出した」という発話を解釈する上で、「話し手に娘がいる」とは「しかたなく」承認される想定である。）
語用論的には、或る特定の認知環境における前提として表現することに最適な関連性があるとして解釈されることで多様なニュアンスが生ずる（それを期待して発話する）と考えられる。 どの認知環境かは語用論的な原理によって推論される。

発見と教示、認識的発話と伝達的発話

話し手が知った内容を述べるのを発見の発話、聞き手に知らせる内容を述べるのを教示の発話と呼ぶことにする。

() あ、雨が降ってる。（発見の発話）
() ほら、花が咲いてるよ。（教示の発話）

発見の発話をノダ文で行うと、話し手の認知環境における前提を表現する。（発見のノダ）

() あ、雨が降ってるんだ。

教示の発話をノダ文で行うと、聞き手の認知環境における前提を表現する。

() ほら、花が咲いてるんだよ。（教示のノダ）

発見用法には認識的用法（ただの独り言）と伝達的用法（発見したということを伝える）がある。

() （窓の外を見て）雨が降ってるんだ。（認識的）
() 雨に降られて大変だったよ。— 雨が降ってるんだ。（伝達的）

教示のノダは基本的に伝達的用法しかない。

() （出掛ける人に）雨が降ってるんだよ。（伝達的）

ノデハナイとノカ

ノデハナイは「発話時点の話し手」以外の認知環境を想定し、そこにおける前提を表現した上で、その前提化を否定する。

() 私は悲しいから泣いた<u>のではない</u>。

ノカは、その内容が真と定まれば（疑問詞を含むならその不明部分を補完した上で）前提として受け入れるつもりを表す。

() 病気なのですか。

様々な用法・ニュアンスの理論的説明づけ

先行文脈に対する説明づけ

先行文脈に対する説明づけとは、先行文脈を理解する上で認知主体にとって必要となる前提を提示する。

() 風邪をひきました。雨に濡れたのです。
() 私は国立大学を二つ受験した。当時は一期校と二期校に分かれていたのだ。
() 娘が熱を出してしまって。— 娘さんがいらっしゃるんですね。

実は必ずしも「先行文脈」に対する前提ではない。

() 娘がいるんです。それが熱を出してしまって。
() 明日デートなんです。そこで一つお願いがあって…。

時間的順序に逆行する矢印で説明を加えるというよりは、述べられた前提を認知環境に加えることによって、改めて先行する発話などを解釈することができることを表していると考えれば統一的に説明できる。

既に定まっていること

() それは僕がやるよ。 / それは僕がやるんだよ。

前提として提示することから原理的に、それを真と認める判断が先行していることになるため（特徴A）、発話時点よりも前から定まっている事柄であることが表される。

反論を受け付けない態度

() （引っ越しを拒む子供が、両親に）僕はここに残るんだ。
() 評論家が何と言おうとこの映画は面白いんだ。

前提は誰もが疑うことなく真として受け入れる事柄なので（特徴B）、受け入れられにくいことをノダによって提示すると、反論を受け付けないという態度が特に強く表現される。

重大さ、押し付けがましさ

() （窓の外を見て）あ、雨が降ってる。 / あ、雨が降ってるんだ。
() （唐突に）ぼく、明日デートです。 / ぼく、明日デートなんです。

或る命題を単なる描写ではなく前提として認識・伝達することは、それを踏まえて言いたいこと（「だからどうした」）が何らかあることを表すため、その命題内容そのものだけの場合よりも「重大」なこととして感じられる。しかも、聞き手における前提としての認知にまで言及することから「押し付けがましさ」として感じられることになる。

非難

() また太った？ / また太ったの？

こうした発話からの推論的解釈は文脈に大きく依存するが、この疑問に対して「また太った」という命題が真として確定した場合、話し手の「だからどうした」は非難する意図なんだろうなあと思うと非難めいた感じを受けることになる。

話し手が責任を持たない

() 太郎君って服のセンスいいよね。— そうだな。/ そうなんだ。
() 祝賀会には誰が来るかな。/ 祝賀会には誰が来るのかな。

前提は話し手自身の判断による主張を表さないため、話し手の判断を述べるべき文脈で用いると責任回避の印象を与えることになる。

納得させようとする

() しっかりエスコートしろ。/ しっかりエスコートするんだぞ。
() その電線に触るな。/ その電線に触るんじゃない。

ノダ文による行為指示は行為そのものを直接描くのではなく、「聞き手がそのように行動する」ということを前提とした上で行動してほしいということを述べるため、それを理性的に納得させようという意図を感じさせる。

相手が充分に認識していないことを伝える

() 今日は朝から大雨でしたが、用事があったので出掛けました。
() 今日は朝から大雨だったのですが、用事があったので出掛けました。
() a. 雨が降ってるから、傘を持って行きなさい。
b. 雨が降ってるんだから、傘を持って行きなさい。

非ノダ表現は相手が認識しているかどうかを形式上明示的に表現するものではなく、文脈によって、あるいは「御存知の通り」などの表現によってどちらとも解釈できる。それに対してノダは特定の認知環境における前提を表すから、その場において改めて認識すべきことが表現される。

まとめ

ノダは、その命題を或る認知環境における前提として表現する。
前提は、
A)その命題を真と認める判断が先に存在すること、
B)その命題を話し手も聞き手も疑うことなく真として受け入れること
が特徴である。
或る特定の認知環境における前提としてその命題を表現することに最適な関連性があるとして解釈されることで多様なニュアンスが生ずる。
なお、発表者はもっと早くから準備すべきである。

参考文献

久野暲 1973『日本文法研究』、大修館書店。
佐治圭三 1991『日本語の文法の研究』、ひつじ書房。
野田春美 1997『「の（だ）」の機能』、くろしお出版。
林大 1964「ダとナノダ」、『講座現代語』6、明治書院。
益岡隆志 1991『モダリティの文法』、くろしお出版。
三上章 1953『現代語法序説』、刀江書院。（復刊：1972、くろしお出版。）
山口佳也 1975「「のだ」の文について」、『国文学研究』56、早稲田大学国文学会。
吉田茂晃 1988「ノダ形式の構造と表現効果」、『国文論叢』15、神戸大学文学部国語国文学会。